

話者指示の領域と視点階層

廣 瀬 幸 生

1. 話者指示の領域*

代名詞と照応に関する類型論的研究では、「話者指示的代名詞」(logophoric pronoun)あるいは「話者指示詞」(logophor)という概念が用いられる。これは間接話法における原話者を指示する代名詞で、いわゆる人称代名詞と形態上区別されるものをいう。logophoricという概念は特にアフリカの言語の類型論的研究に端を発し、Hagège (1974)により導入されたが、今日では、照応現象一般に関する研究においてよく用いられるようになってきている。

たとえばClements (1975)によれば、西アフリカのエウェ語 (Ewe) には話者指示詞として yè があり、(1)に示すように発話動詞の間接話法補部において人称代名詞の e と対立する (下付きの i は同一指示を表す)。

- (1) a. Kofi_i be yè_i-dzo.
 Kofi say LOG-leave
 ‘Kofi_i said that he_i left.
- b. Kofi_i be e_k-dzo.
 Kofi say 3sg-leave
 ‘Kofi_i said that he/she_k left.

(1a)で yè は主節主語の Kofi と同一指示であり、これは直接話法では一人称の I にあたるものである。一方(1b)の e は三人称単数の代名詞で、英語で言えば、he あるいは she にあたる。この e を用いると、yè とは異なり、主節主語の Kofi を指すことはできず、他の人を指すと解釈される。

(1)の例に見られる yè と e の対立は、次の日本語の例における「自分」と「彼」の対立に類似していると考えられる。

- (2) a. 秋男は、自分は気が弱いと言っている。
 b. 秋男は、彼は気が弱いと言っている。

「彼」の場合は、特別な文脈がないかぎり、主節主語の「秋男」と同一指示的と解釈するのが難しいのに対して、「自分」は必ず秋男を指す。そうすると、間接話法補部に生じる「自分」はエウエ語の *yè* と同様に話者指示詞的機能をもつことができる。実際、久野 (1978) は、日本語の再帰代名詞「自分」に関して、次の「話者指示詞的用法の仮説」を提案している。

(3) 「自分」の話者指示詞的用法

発話、思考、意識等を表わす動詞に従属する節の中で用いられる「自分」は、その発話、思考、意識の発話者、経験者を指す機能を持つ。(久野 1978:213)

この久野の仮説については後で立ち返る。

話者指示詞の類型論的研究では、話者指示詞が認可される領域（以下「話者指示領域」）には(4)に示すような階層関係が存在するということが指摘されている (Stirling 1993; Culy 1994, 1997; Huang 2000)。

(4) 話者指示領域の階層

発話 (speech) > 思考 (thought) > 知識 (knowledge) > 直接知覚 (direct perception)

この階層が意味するのは、say や「言う」などの発話動詞の補部節がもっとも話者指示詞が認可されやすい環境であり、続いて、think や「思う」などの思考動詞の補部節、事実前提のある知識を表す、know や「知る」などの叙実動詞の補部節、そして see, hear や「見る・聞く」などの直接知覚を表す補部節という順になる、ということである。¹ これは、また、含意的普遍性 (implicational universal) の特徴も示す。つまり、ある言語で、たとえば思考動詞の補文節が話者指示領域を形成するならば、発話動詞の補部節も必ず話者指示領域を形成する、ということであり、また、叙実動詞の補部節が話者指示領域を形成するのに、思考動詞や発話動詞の補部節が話者指示領域を形成しないというような言語は存在しない、ということである。

Culy (1994) は、話者指示詞をもつアフリカの29の言語を調査し、(4)の階層性を裏付ける、次のような統計を提示している。

表1 話者指示領域に関する動詞の頻度 (Culy 1994:1061)

動詞	話者指示詞を許す 言語の数	話者指示詞を許さない 言語の数	合計
say	29	0	29
think	13	0	13
know	6	1	7
hear	0	3	3

この表で最もはっきりしているのは、29のすべての言語において say にあたる発話動詞は話者指示詞を認可するということである。think にあたる思考動詞については、話者指示詞を認可する言語が13で、一方、話者指示詞を認可しないことがわかっている言語はない。know にあたる叙実動詞については、話者指示詞を認可する言語が6で、認可しないことが明らかな言語が1つある。

表1でもう一つ特徴的なのは、hear などの知覚動詞に関する点である。Culy (1994) の調査したアフリカの言語においては、直接知覚を表す動詞でその補部に話者指示詞を認可するものはないということである。たとえばエウエ語では、(5a)に示すように、叙実動詞の補部節は話者指示領域をなし、話者指示詞の yè が生じるが、(5bi) に示すように、知覚動詞の補部節はそのかぎりではない (Clements 1975, Stirling 1993, Culy 1994)。知覚動詞の場合は yè ではなく、(5bii) のように三人称代名詞の e が現れないといけない。ところが、(5bi) に対応する文を発話動詞の補部節に埋め込むと、(5c) のように、yè が容認される。これは発話動詞補部が話者指示領域をなすからである。

(5) a. 叙実動詞：話者指示的

Kofi nya be me-kpɔ yè
Kofi know COMP PRO-see LOG
'Kofi_i knew that I had seen him_i.'

b. 知覚動詞：非話者指示的

(i) *Kofi se Koku wɔ̀-nɔ̀ yè dzu-m.
Kofi hear Koku PRO-be LOG insult-PROG

'Kofi heard Koku insulting him.'

(ii) Kofi se Kɔku wɔ̀-nɔ e dzu-m.

Kofi hear Koku PRO-be PRO insult-PROG

'Kofi heard Koku insulting him.'

c. 発話動詞：話者指示的

Kofi gblɔ be yè-se Kɔku wɔ̀-nɔ yè dzu-m

Kofi say COMP LOG-hear Koku PRO-be LOG insult-PROG

'Kofi said that he heard Koku insulting him.'

上で述べたように、日本語の再帰代名詞「自分」には話者指示的用法がある。アフリカの言語における話者指示詞と異なり、「自分」は、(6)に示すように、知覚動詞補部に生じる。

- (6) a. 秋男_iは、夏子が自分_iのことを侮辱しているのを聞いた。
 b. 秋男_iは、春男が自分_iの妻と密会しているところを見た。

Huang (2000:194) は、中国語や韓国語の再帰代名詞にも同様なことが言えるということから、これらアジアの言語における再帰代名詞は知覚動詞補部に生じた場合は、話者指示的であると主張する。さらに Sells (1987) などは、知覚動詞補部だけでなく、複文に生じる「自分」(同一節内に先行詞をもたないもの)は、すべて話者指示的と見なす。たとえば、(7)の関係節における「自分」も話者指示的と考えるわけである。

(7) 秋男は、自分の生まれた町を訪れた。

このような場合、「話者指示的」という概念を広い意味で使っていると思われるが、そもそも(7)の例におけるような「自分」を話者指示的と特徴づけるのは適切かということが問題となる。

そこで、本研究では話者指示性に関して次の3つの問いを設定する。

- ①話者指示詞とは何か。
- ②話者指示領域の階層性は何によって動機づけられるか。
- ③知覚動詞補部に生じる「自分」は話者指示的と言えるか。

問①は話者指示詞の本質に関わるもので、話者指示詞が認知論的にどのように特徴づけられるかという問題である。問②は、(4)に示した階層関係がどうして存在するのかということである。問③に答えることは、より一般的には、アフリカの言語における話者指示詞は知覚動詞補部に生じないのに、なぜ日本語の「自分」およびそれに相当する中国語・韓国語の再帰代名詞は生じられるのかということに答えることにもなる。要するに、知覚動詞補部に生じる「自分」を話者指示的と特徴づけるのが適切なのか不適切なのかを言語学的にどのように論証するかが問題となる。以下本稿では、上記3つの問いに対してしかるべき解答を与えたい。

2. 「話し手」の解体と公的表現・私的表現

話者指示詞の問題を考える際には、拙論でこれまで主張してきたように、² 言語主体としての「話し手」という概念を「公的自己」と「私的自己」という二つの側面に解体することが極めて重要である。公的自己というのは、聞き手と対峙する伝達の主体としての側面であり、私的自己とは、聞き手の存在を想定しない思考・意識の主体としての側面である。さらにここでは、公的自己・私的自己は「公的表現・私的表現」という異なるレベルの言語表現の主体と特徴づけられる。

公的表現とは言語の伝達の機能に対応する言語表現のレベルで、一方、私的表現とは伝達を目的としない、言語の思考表現機能に対応する言語表現のレベルである。公的表現と私的表現の根本的な違いは、前者は聞き手の存在を前提とするが、後者は前提としないという点にある。言語表現のなかには聞き手の存在を必ず前提とするものがある。そういう「聞き手志向」表現の典型例として、日本語には、①「よ」や「ね」など一定の終助詞、②「生まれ」などの命令表現、③「おい」などの呼びかけ表現、④「はい・いいえ」などの応答表現、⑤「です・ます」など丁寧体の助動詞、⑥「(だ) そうだ」などの伝聞表現などがある。これら聞き手志向の表現は、定義上、公的表現としてしか用いられない。聞き手志向表現を含む句や文もまた、聞き手への志向性をもつことになり、公的表現として機能する。一方、聞き手志向表現を含まない句や文は、話し手が他者への伝達を意図して用いないかぎりは私的表現であり、一定の思いを表現したものにはすぎない。

公的表現は話し手の伝達態度にかかわるのに対し、私的表現は話し手の心的状態に対応する。心的状態は「思う」を始めとする思考動詞によって記述される。思考内容を表す言語表現のレベルは私的表現でなければならないので、「思考動詞は、その引用部に私的表現しかとることができない」という制約を受ける。たとえば(8)-(9)を比べてみよう（以下、〈 〉は私的表現を、[]は公的表現を表す）。(8)では下線部の表現が確信・推量という心的状態を表すので、引用部は私的表現で、文法的となる。それに対し(9)では、下線部の聞き手志向表現が引用部全体を公的表現にしているため、非文法的となる。

- (8) a. 秋男は、〈雨にちがいない〉と思っている。
 b. 秋男は、〈雨だろう〉と思っている。
 (9) a. *秋男は、[雨だよ]と思っている。
 b. *秋男は、[雨です]と思っている。

一方、「言う」をはじめとする発話動詞は思考動詞とは異なり、その引用部に私的表現も公的表現もとることができる。たとえば(10)では、公的表現としての発話がそのまま引用されていると考えられる。(10)の引用部は、秋男の夏子に対する伝達態度とともに、雨だという秋男の思いも伝えているので、(11)のように、秋男の発言を私的表現のレベルで報告することも可能である。英文法でいう話法の区別から言えば、(10)が直接話法で、(11)が間接話法にあたる。

- (10) a. 秋男は夏子に [雨だよ] と言った。
 b. 秋男は夏子に [雨です] と言った。
 (11) 秋男は夏子に 〈雨だ〉と言った。

このことから一般に、「直接話法とは公的表現の引用であり、間接話法とは私的表現の引用である」と言える（詳細は Hirose (1995) 参照）。この点は後でも取り上げる。

ここで私的自己・公的自己の話に移る。この点に関する日英語の違いは結論だけ先に示すと(12)と(13)のようになる（より詳細な議論は、廣瀬 (1997)、Hirose (2000) を参照）。

- (12) 日本語には私的自己を表す固有のことばとして「自分」があるが、公的自

己を表す固有のことばはないため、誰が誰に話しかけているかという発話の場面的な要因に左右される様々なことばが代用される。

- (13) 英語には公的自己を表す固有のことばとして I があるが、私的自己を表す固有のことばはないため、当該私的表現が誰のものか、つまり、一人称のものか、二人称のものか、三人称のものかにより、本来的には公的な人称代名詞が私的自己を表すのに転用される。

ここで特に重要なのは、日本語では私的自己を表すことばと公的自己を表すことばが別々に存在するという点である。私的自己は、「自分」という語で表されるのに対し、公的自己を表すことばは多様で、「ほく・わたし」などを始めとして、「お父さん」などの親族名や「先生」などの職業名も用いられ、どの語を用いるかは発話場面により決まる。

「自分」が私的自己を表し、「ほく・わたし」などが公的自己を表すというのは、次の例に見られる容認可能性の違いから言える。

- (14) 自分は天才だという意識
 (15) # {ほく／わたし} は天才だという意識

(14)はそれ自体で自己完結的な表現であり、「自分」は当該意識の主体、つまり私的自己を指す。それに対し(15)は、適切な文脈がないと奇妙に感じられる。これはどうしてかという点、「ほく・わたし」は伝達の主体としての公的自己を表す公的表現であり、したがって意識の内的な（私的）描写には現れないからだと考えられる。(15)が容認されるのは、(16)に示すように、話し手が意識した内容を他者に伝えるという伝達的な状況で用いられる場合のみである。

- (16) {ほく／わたし} が、{ほく／わたし} は天才だという意識をもったのは、
 ちょうどその時でした。

この文で二番目の「ほく・わたし」による記述が可能なのは、問題となる意識を他者に伝えようとする伝達主体がその意識の外側に存在するため、その伝達主体としての公的自己に「ほく・わたし」が結びつくからである。ところが(15)のようにしかるべき文脈が与えられていない場合は、「ほく・わたし」が結びつくべき公的自己が想定できないので、奇妙に感じられるわけである。一方(14)

が容認されるのは、「自分」が表す私的自己が当該意識内に想定でき、その私的自己在意識内容を意識していると自己完結的に解釈することができるからである。

ここで、(17)のような文における「ぼく」の解釈が二通りにあいまいである点に注意したい。

(17) 秋男は、ぼくは速く走れないと言っている。(「ぼく」=秋男/伝達者)

一つは「ぼく」が秋男を指す読みで、この場合は、英語の直接話法に相当する。もう一つは「ぼく」が伝達者を指す読みで、この場合は間接話法である。この解釈上の違いは、引用部全体が公的表現なのか、それともその一部である「ぼく」だけが公的表現なのかの違いによる。したがって、(17)の引用部には次のような二通りの表示を与えることができる。

(18) a. 秋男は、[ぼくは速く走れない]と言っている。

(秋男：公的表現の主体)

b. 秋男は、〈[ぼく]は速く走れない〉と言っている。

(秋男：私的表現の主体)

(18a)では引用部全体が公的表現で、その主体は秋男だから、公的自己を表す「ぼく」は秋男に結びつけられる。それに対し、引用部が私的表現である(18b)では、秋男は私的表現の主体だから「ぼく」は秋男には結びつかず、その結果、伝達者に結びつけられる。一方(19)のように「自分」を用いると、「自分」は秋男を指し、それ以外の人を指す解釈はない。

(19) 秋男は、〈自分は速く走れない〉と言っている。(「自分」=秋男)

これは、(19)で私的表現の主体は秋男だから、私的自己を表す「自分」は秋男に結びつかなければならないからである。

ここで注目すべきは、私的自己を表す固有のことばとして「自分」という語があることによって、日本語では、話し手が誰であってもその私的自己是「自分」で表すことができるという点である。したがって、(20)に例示するように、「自分」はいかなる人(人称)に対しても一定不変である。

(20) 「ほく／きみ／あの人」は、＜自分は速く走れない＞と言った。

一方、英語には日本語の「自分」にあたるような私的自己を表す固有のことばはない。そのため英語は、公的自己の I を中心とした人称代名詞を転用して私的自己を表すという仕組みになっている。たとえば(21)の直接話法を間接話法に転換しようとする、公的自己の I を、私的自己を表すことばに置き換えなければならないが、英語では、X に関する情報が与えられてはじめてそれが可能となる。たとえば、(22a)のように X が I なら私的自己も I、(22b)のように X が you なら私的自己も you、(22c)のように X が John / Mary なら私的自己は he/she というように人称代名詞が私的自己を表すのに用いられる。

(21) X said, [I can't run fast].

(22) a. I said (I can't run fast).

b. You said (you can't run fast).

c. {John/Mary} said ([he/she] can't run fast).

つまり、英語には私的自己を表す固有のことばがないために、当該私的表現が誰のものか、つまり、一人称のものか、二人称のものか、三人称のものかにより、公的自己の I を中心とした人称代名詞が私的自己を表すのに転用される、ということになる。

3. 話法と話者指示詞

さて、ここで注目すべきは、「公的表現・私的表現」にもとづく分析では、「直接話法・間接話法」という概念に頼らずに話法現象を説明することができるという点である。たとえば(22)の例では、「ほく」は主語の秋男を指す読みはなく、伝達者としての話し手を指す解釈しかない。これは「信じる」という動詞が思考動詞だから、(22a)のようにその補部に公的表現をとることができず、秋男が公的表現の主体と解釈される可能性がないからである。したがって(22)に許される解釈は(22b)しかなく、そこでは秋男は私的表現の主体なので、公的表現の「ほく」は伝達者に結びつくことになる。

- (22) 秋男は、ほくに事故の責任があると信じている。(「ほく」=伝達者)
 a. *秋男は、[ほくに事故の責任がある]と信じている。
 b. 秋男は、〈[ほく]に事故の責任がある〉と信じている。

さらに興味深いことに、このような「ほく」の解釈上の特性は、(23)における終助詞「ね」の解釈と平行的である。

- (23) a. *夏子は、[春男はすてきな人だね]と信じているんだ。
 b. 夏子は、〈春男は[ね]、すてきな人だ〉と信じているんだ。

(23a)では、「ね」は引用部全体を支配する文末表現であり、引用部全体を公的表現とする。しかし、思考動詞は私的表現しかとれないので(23a)は非文法的となる。一方(23b)では、「ね」は伝達者による一種の挿入表現であり、伝達者の聞き手に対する発話態度を表していると解釈される。

このような点に関しては、英語も日本語と同様であることが次例からわかる。

- (24) a. Akio believes 〈[I] am responsible for the accident〉.
 b. Natsuko believes (Haruo, [you know], is a nice person).

思考動詞の believe はその補部に私的表現しかとれないので、公的自己を表す I は主語の Akio を指すことはできず、また、公的表現の you know も主語の Natsuko に帰することはできない。日本語の場合と同様に、どちらも公的自己としての伝達者に結びつけて解釈される。

ここで、1節の(3)に示した、久野(1978)による「自分」の話者指示詞的用法の仮説に立ち返ろう。「公的表現・私的表現」にもとづく分析では、この仮説自体を次のようにして導くことができる。①「発話、思考、意識等を表わす動詞に従属する節」には私的表現が用いられ(ただし発話動詞の場合に限っては公的表現もとれる)、「その発話、思考、意識の発話者、経験者」はその私的表現の主体、つまり私的自己と見なされる。②「自分」は私的自己を表す固有のことばである。③よって、仮説(3)が導かれる。つまり、話者指示詞的用法の仮説は、私的表現・私的自己という、独立した動機づけをもつ概念によって裏付けられるということになる。

そうすると、話者指示領域の意義というのは次のように特徴づけることがで

きる。話者指示詞が認可される話者指示領域は、私的表現の主体である私的自己の思いが描かれる領域である。したがって、話者指示領域の階層性は私的表現の「私的性」が保証される領域の階層性、つまり、私的自己の内なる思いがその内側から記述される可能性の高さに対応すると言える。以下、この観点から発話動詞、思考動詞、叙実動詞、知覚動詞について考える。

まず、発話動詞は、発話主体の思いをその内側から記述するのに最も適した述語である。なぜなら、公的表現としての発話は、発話主体の私的表現レベルの思いを必ず含意するからである。したがって、発話動詞が間接話法で用いられた場合は、発話（伝達）そのものを記述するのではなく、発話（伝達）によって伝えられる思いを記述する。たとえば(25)で、夏子が春男に「東京は雨ででしょうか。」と言ったとすると、

(25) 夏子が春男に：東京は雨ででしょうか。

[東京は雨ででしょうか]という公的表現の発話（春男への質問）は、〈東京は雨だろうか〉という私的表現の思い(疑い・疑問)を伝えていることになる。したがって、夏子の発話を公的表現レベルで引用すると(26a)のようになり、これがいわゆる直接話法である。それに対し、私的表現レベルで引用すると(26b)のようになり、これがいわゆる間接話法である。(26b)は夏子の思いを描いており、思考動詞を含む(27b)に対応する。つまり、発話からは常に発話主体の内的な思いが確実に捉えられるということになる。

(26) a. 夏子は春男に、[東京は雨ででしょうか]と尋ねた。

(公的表現：直接話法)

b. 夏子は春男に、〈東京は雨だろうか〉と尋ねた。

(私的表現：間接話法)

(27) a. *夏子は、[東京は雨ででしょうか]と思っている。

b. 夏子は、〈東京は雨だろうか〉と思っている。

次に思考動詞について考える。思考動詞は、思考主体の思いをその内側から記述する場合にも用いられるが、それに加えて、思考主体の行動を話し手が外側から観察して、その思いを推察する場合にも用いられる。たとえば(28)では、電車が不通になったことを知ったスミスが、いつもの朝のように駅まで急いで

いくジョーンズを見て, Jones believes that the trains are working, つまり, 「ジョーンズは, 電車が動いていると思っている。」という状況である。

(28) Smith, who has discovered that there has been a sudden railway stoppage, sees Jones making his habitual morning dash to the station, and says, 'Jones believes that the trains are working'. (Urmson 1963: 230)

- (29) a. Jones believes that the trains are working.
b. ジョーンズは, 電車が動いていると思っている。

この状況では, (29)の believes や「知っている」は発話動詞の says や「言っている」には置き換えられないことに注意しなければならない。要するに, 思考動詞には外側から思いを推察する用法があるが, 発話動詞にはないということである。このことから, 思考動詞と発話動詞では, 私的自己の内なる思いの記述には発話動詞のほうがより信頼性があるということになる。

続いて叙実動詞について考える。叙実動詞は, その主語の思いを記述すると同時に, その思いが外的世界でも成り立つという前提が話し手によって外側から付け加えられる。たとえば(30)のように, 秋男が「筑波大学は2003年に開学30周年を迎えましたね。」と発言したとする。この秋男の発言を私的表現に還元して, 思考動詞を用いて(31a)のように伝えた場合は, 秋男の思いを秋男個人とだけ結びつけることになる。それに対し, 叙実動詞を用いて(31b)のように伝えた場合は, 秋男の思いが秋男以外の人との共有知識であることが強調される。

(30) 秋男の発言: 筑波大学は2003年に開学30周年を迎えましたね。

- (31) a. 秋男は, 〈筑波大学は2003年に開学30周年を迎えた〉と思っている。
(秋男の思い中心)
b. 秋男は, 〈筑波大学は2003年に開学30周年を迎えた〉ということを知っている。
(秋男の思いは共有知識)

したがって, 思考動詞と叙実動詞を比べると, 思いの内的性・私的性の度合いは思考動詞より叙実動詞のほうが低いと言える。

最後に, 知覚動詞について考える。知覚動詞の補部は知覚主体の思いを記述

するのではなく、外的な知覚対象を記述する。したがって、まず、知覚動詞補部が記述する事態は事実性を含意する。たとえば(32)でメラニーがジャッキーが走るのを見たら、ジャッキーは走っていたということが成り立つ。

(32) If Melanie saw Jackie run, then Jackie ran.

(Barwise & Perry 1983:188)

次に、知覚動詞補部は指示的に透明である。指示的に透明というのは、指示対象が同一の表現を入れ替えても、文の真理値が変わらない場合をいい、真理値が変わる場合は指示的に不透明という。思考動詞や叙実動詞の補部は指示的に不透明である。たとえば(33a)で、「ジョージ4世は、(イギリスの小説家)スコットが『ウェイバリー』(という小説)を書いた」と思っていた/ということを知っていた」が真で、かつ、「スコットは『アイバンホー(黒騎士)』の著者である」も真だとしても、だからといって、「ジョージ4世は、『アイバンホー』の著者が『ウェイバリー』を書いた」と思っていた/ということを知っていた」が真になるとは限らない。というのは、ジョージ4世がスコットが『アイバンホー』の著者であるということを知らなかった可能性もあるからである。このことから、思考動詞や叙実動詞の補部では指示対象を概念的にどのようにつえ認識しているかということが重要だと言える。それに対し、知覚動詞の補部は、Barwise & Perry (1983) が指摘しているように、指示的に透明である。たとえば(33b)で、「(哲学者の)ラッセルは(同じく哲学者の)ムーアがケンブリッジでひげをそり落とすところを見た」が真で、かつ、「その当時もう、ムーアは『プリンキピア・エチカ(倫理学原理)』を著していた」も真だとすると、「ラッセルは『プリンキピア・エチカ』の著者がケンブリッジでひげをそり落とすところを見た」も真だと言える。ということは、直接知覚の場合は、知覚対象を概念的に認識している必要はないということになる。

(33) a. George IV *[believed/knew]* that Scott wrote *Waverly*.

Scott was the author of *Ivanhoe*.

So, George IV *[believed/knew]* that the author of *Ivanhoe* wrote *Waverly*.

b. Russell *saw* G. E. Moore get shaved in Cambridge.

G.E. Moore was (already) the author of *Principia Ethica*.

So, Russell *saw* the author of *Principia Ethica* get shaved in Cambridge.

(Barwise & Perry 1983:Ch.5)

同様な議論は名詞句の指示だけでなく、述語表現の内容理解についても言え、それを示すのが Gee (1977) からの例(34)である。

- (34) a. #John {*believes/knows*} your brother *stole* his car, though he doesn't know it was *stealing* (or: he was *stealing* it).
 b. John (actually) *saw* your brother *steal* that car, though he didn't know he was *stealing* it (or: it was *stealing*).
 c. #John *saw that* your brother was *stealing* the car, though he didn't realize he was *stealing* it (or: it was *stealing*). [see that S: 叙実動詞]

(Gee 1977:475)

(34a)の思考動詞・叙実動詞の場合は、主節主語が補部節内の述語動詞の意味内容を認識していることが不可欠であるため、それを認識していないと述べる文を続けると容認されなくなる。これは、日本語でも同様で、「ジョンは、君の弟が車を盗んだ}と思っている/ということを知っている}が、それが盗みだったということは知らない」というのは意味的におかしい。ところが、(34b)のように、知覚動詞が直接知覚を表す場合は、主節主語は一定の行為を知覚していても、その行為の内容を概念的に認識している必要はない。だから、行為の内容を認識していないことを示す文を続けても矛盾することはない。これも日本語でも同様で、「ジョンは(実際)君が車を盗むところを見たのだが、それが盗みだったとは気づいていなかった」というのは容認される。³ なお、(34c)のように、動詞 *see* を *that* 節とともに用いると、もはや直接知覚は表さず、注1でも触れたように、認識を表す叙実動詞になる。

このように見てくると、1節で設定した3つの問いのうち、問①と問②に対する解答が得られることになる。ここでもう一度問いを繰り返すと、問①は、話者指示詞とは何か、そして問②は、話者指示領域の階層性は何によって動機づけられるか、というものであった。これら2つの問いに対しては、合わせて次のように答えることができる。話者指示詞は、伝達の主体である公的自己と

- (36) a. 秋男は、自分が友達から借りた本を冬に売ったが、その本が自分が友達から借りたものだと気づいていない。
 b. 秋男は、自分は頑固だと言っている。 (話者指示詞的用法)

さて、廣瀬 (1997, 2001) や Hirose (2002) において論じられているように、視点的用法の「自分」は、話し手が他者に投影した「客体的自己」を表す。客体的自己とは何かを説明するために、(37)の英文の日本語訳について考えてみよう。

- (37) I dreamed that I was lonely.

この文は二通りに解釈することができる。一つは、夢を見ている主体としての話し手が夢の中でさびしいと思ったという読みで、これは日本語では(38a)のように表現できる。もう一つの解釈は、夢の中に話し手自身の分身が登場し、話し手はその自分を見てさびしがっていると思ったという読みで、この場合は(38b)のように言い表すことができる。

- (38) a. ほくは自分がさびしかった夢を見た。
 b. ほくは自分がさびしがっている夢を見た。

(38a)と(38b)では「自分」のもつ意味合いは異なる。(38a)の「自分」は夢を見ている主体としての話し手を指すのに対し、(38b)の「自分」は、夢を見ている主体から切り離されて夢の中に現れる客体的存在としての話し手を指す。主体から切り離された「自分」はいわば他者と同じ側におかれるので、(38b)の「自分」の位置には(39)のように他者を表すことばも生じる。それに対し、(38a)の「自分」は夢を見ている主体の側にあるので、(40)に示すように、その位置には他者を表すことばは生じない。

- (39) ほくは |自分/秋男| がさびしがっている夢を見た。
 (40) ほくは |自分/*秋男| がさびしかった夢を見た。

話し手の客体的自己とは、(39)の「自分」のように、主体としての話し手から切り離されて他者と同じ側におかれる自己をいう。そして、この客体的自己が

他者に投影された場合が(35a)の例に見られる視点表現の「自分」である。(35a)では、話し手は他者である秋男に客体的自己を投影することで、秋男を自分に近づけていることになる。つまり、話し手の客体的自己は話し手から見れば他者よりも位置するが、他者それ自体よりは話し手に近いという両面的な性格(いわば、自己の他者化と他者の自己化という二面性)をもつわけである。そうすると、客体的自己は(41)に示すように話し手と他者の間に位置づけることができる。

(41) 話し手 > 客体的自己 > 他者

さらに、2節で見たように、話し手は私的自己と公的自己に解体されるので、それを話し手が状況を見る視点と結び付けて定式化したのが、(42)の「状況の関与者に関する視点階層」という原則である。

(42) 話し手が一つの状況を見るとき、その状況の関与者におく視点は次の優先順位に従わなければならない。

私的自己 > 公的自己 > 客体的自己 > 他者

(「自分」 > 「ぼく・わたし」 > 「自分」 > 「彼・彼女」)

(42)の視点階層を説明するために、以下、「(て) やる・(て) くれる」のような視点が関与する動詞との共起関係を見ていく。「(て) やる・(て) くれる」という補助動詞は、行為による恩恵の授与を表す動詞で、「やる」のほうは恩恵の与え手側に、「くれる」のほうは恩恵の受け手側に話し手の視点がおかれることを含意する。

これを使って、まず話し手と他者の場合を見てみる。(43)で他者の秋男と話し手の「ぼく」では、「ぼく」に視点がおかれる。「ぼく」は恩恵の受け手なので、「やった」ではなく「くれた」になる。

(43) 秋男はぼくを励まして |くれた/*やった|。(ぼく > 秋男)

次に、客体的自己と他者を比べる。(44)で「自分」は話し手が秋男に投影した客体的自己を表し、それは恩恵の受け手になっている。「くれた」が選ばれることから、他者の冬子より客体的自己の「自分」に視点がおかれなければならない

ないことがわかる。

- (44) 秋男は、冬子が自分に編んで {くれた/*やった} セーターを毎日着ている。
(自分₂ (秋男) >冬子)

今度は、話し手と客体的自己を比べる。(45)で「自分」は話し手が冬子に投影した客体的自己を表す。「やった」より「くれた」が選ばれることから、「自分」より「ほく」のほうに視点がおかれなければならないということになる。

- (45) 冬子は、自分がほくに編んで {くれた/*やった} セーターを、その日まで隠していた。
(ほく > 自分₂ (冬子))

ただし(45)は「くれた」を選んだ場合でも、少々落ち着きが悪いと感じる話者もいるかもしれない。これは、「自分」の表す客体的自己と「ほく」の表す話し手(公的自己)との視点階層上の距離が近いこと、意味的対立もそれほど鮮明でないからだと思う。「自分」の代わりに、冬子を他者として捉える「彼女」を用いると、「ほく」との視点階層上の対立がより鮮明になり、次のようにより自然な文になる。

- (46) 冬子₁は、彼女₂がほくに編んで {くれた/*やった} セーターを、その日まで隠していた。
(ほく > 他者 (冬子))

最後に、私的自己と公的自己を比べる。(47)の発話動詞の補部で「自分」は秋男の私的自己を表し、「ほく」は伝達者の公的自己に対応する。この場合、上で見た(45)の例とは異なり、「くれた」ではなく「やった」が選ばれるので、「ほく」ではなく「自分」のほうに視点がおかれなくてはならない。つまり、客体的自己の「自分」は公的自己の「ほく」より視点階層において低いが、私的自己の「自分」は「ほく」より高いということである。

- (47) 秋男は、自分が [ほく] にお金を貸して {くれた/やった} と言っている。
(自分₁ (秋男) > ほく)

このように見てくると、(42)の話し手の視点階層は最も内的な私的自己から最

も外的な他者までの階層関係を表すと考えられる。その意味で話者指示領域の階層と平行的であると言える。したがって、(48)の発話領域や(49)の思考領域では、私的自己の「自分」が生じ、それは公的自己の「僕」より、視点階層で高いということになる。

- (48) 秋男は、事故のとき自分がほくを助けて |やった/*くれた| と言っている。
(発話領域：自分>ほく)
- (49) 秋男は、事故のとき自分がほくを助けて |やった/*くれた| と思っている。
(思考領域：自分>ほく)

それに対し、叙実動詞補部が表す知識領域に現れる「自分」には、私的自己だけでなく、客体的自己も可能である。たとえば(50)のように、補部が「ということ」という形の場合は「自分」は私的自己を表し、「ほく」より「自分」に視点がおかれるので、「くれた」ではなく「やった」が選ばれる。それに対し、補部が「こと」の形をとると、「自分」はもはや私的自己を表さないうで、客体的自己を表すと考えられる。その証拠に、(51)では「自分」に視点をおく「やった」は容認不可能で、「くれた」のほうを選ばないといけない。ただし「くれた」にした場合も、完全に容認可能とはいえないかもしれない。それはおそらく公的自己の「ほく」と客体的自己の「自分」では視点階層上の対立が弱いからだと思われる。(この場合も、「自分」を「彼」に変えたり、省略すると容認度は上がる。)

- (50) 秋男は、そのビデオを見て、事故のとき自分がほくを助けて |やった/*くれた| ということがわかった。
(知識領域：自分>ほく)
- (51) 秋男は、事故のとき自分がほくを助けて |*やった/?くれた| ことをよく覚えている。
(知識領域：ほく>自分)

最後に、知覚動詞補部が表す知覚領域に現れる「自分」について考える。例(52)を見ると、「やる」ではなく「くれる」が選ばれることから、「自分」より「ほく」に視点がおかれなければならない。ということは、知覚領域に現れる「自分」は私的自己ではなく客体的自己を表すということになる。

- (52) 秋男は、事故のとき自分がほくを助けて |*やる/くれる| ところをビデオ

オで見た。

(知覚領域：ほく>自分)

そうすると、問③に対する答えは次のようになる。つまり、知覚動詞補部に生じる「自分」は私的自己ではなく客体的自己を表すので、話者指示的とは言えない。なぜなら、話者指示詞は、内的な思いの主体である私的自己を表すからである。したがって、一般に、話者指示詞が(日本語の「自分」とは異なり)視点的用法へと意味拡張されない言語では、知覚動詞補部に話者指示詞が生じることはない。Culy (1994) の調査したアフリカの言語はそのような特徴をもつと推測される。要するに、話者指示性と視点は関連していても、基本的には別個の現象と捉えなければならないということである(関連する議論として Culy (1997) も参照)。⁴

5. まとめ

以上本稿では、話者指示詞および話者指示領域をめぐる問題について、私的表現・私的自己・話し手の視点階層という観点から論じてきた。本稿の主張をまとめると、次のようになる。

- ①話者指示詞は、伝達の主体である公的自己とは区別される、内的な思いの主体である私的自己を表す。したがって、話者指示詞が認可される領域は私的自己の思いをその内側から記述できる領域でなければならない。
- ②発話>思考>知識>直接知覚という話者指示領域の階層は、私的自己の内なる思いがその内側から記述される可能性の高さに対応するものである。したがって、文法的には、思いの内的性(私的性)をより確実に保証できる述語ほど、話者指示領域を導入しやすいと言える。
- ③直接知覚の領域には私的自己がかかわらないので、話者指示詞は生じない。知覚領域に生じる自己は、私的自己から切り離されて他者の側に置かれる客体的自己である。日本語のような言語では、いわゆる再帰代名詞が私的自己だけでなく客体的自己を表す用法があるが、客体的自己を表す用法は話者指示詞と見なしてはいけない。

注

- * 本稿は、2003年10月1日に、筑波大学「対照研究プロジェクト」セミナーにおいて発表した内容に加筆修正を施したものである。発表の際に貴重なコメントをくださった方々、とりわけ、古川直世先生、砂川有里子氏、沼田善子氏、杉本武氏に謝意を表す。本研究は文部科学省の科研費（15320048）の助成を受けている。
- 1 直接知覚は、英語では、(i)に示すように、知覚動詞が対格プラス原形不定詞あるいは現在分詞・過去分詞をとる形、日本語では、(ii)に示すように、「の／ところ」をとる形で表現される。
 - (i) a. I saw the boy run away.
b. I saw the boy running away.
c. I saw a few of the trees struck by lightning.
 - (ii) ぼくは、少年が走り去る |の／ところ|を見た。
 - (iii) のように that 節や、(iv)のように「(という) こと」をとると、もはや直接知覚ではなく、叙事的な認識（つまり知識）を記述することになる。
 - (iii) I saw that I was mistaken.
 - (iv) 前章では、言語が人間精神を映す鏡であるということを見た。
 - 2 Hirose (1995, 2000, 2002), 廣瀬 (1997, 2002), 廣瀬・長谷川 (2001), Hasegawa & Hirose (forthcoming)などを参照。
 - 3 以上は典型的な知覚記述の特徴であり、直接知覚というのはこの典型的な場合が想定されているものである。一方、知覚現象には幻覚や錯覚など特殊なものもあり、これらの場合は別扱いが必要となる。この点については、Kirsner & Thompson (1976), Lakoff (1987: 125-130)などを参照。
 - 4 上で見たように、「自分」の話者指示詞の用法から視点的用法への拡張には、話し手の知覚領域における自己の客体化・他者化が関与する。さらに、「自分」には(35b)のような再帰的用法があるが、廣瀬 (1997) や Hirose (2002) において論じられているように、再帰的用法は視点的用法から自己の客体化・他者化が話し手の領域を越えて、状況の主体一般のなかで起こることによって生じるものである。エウエ語の話者指示詞 *yè* は、知覚領域に生じないことから視点用法がないということがわかる。さらに拙論の分析からは、視点的用法がなければ再帰的用法もないと予測される（自己の客体化・他者化が起こらないから）。そして、その予測は正しい。Clements (1975) によれば、*yè* は英語の再帰代名詞のように用いられない。次の(i)に示すように、再帰的用法は、*yè* ではなく、人称代名詞に *self* を意味する強調詞をつけて表現する。これは、(ii)に示した日本語の「彼自身」と同様な表現手段である。
 - (i) Kofi lɔ̃ [*yè / e doku]
Kofi love LOG / PRO self
'Kofi loves himself.'
 - (ii) 秋男は |自分／彼自身| を責めた。
 このように、話者指示詞が再帰的に用いられない場合には、視点的用法への意味拡張もないということが一般的に成り立ち、したがって、直接知覚の領域に生じることもないということが言える。

参考文献

- Barwise, Jon and John Perry (1983) *Situations and Attitudes*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Clements, George N. (1975) "The Logophoric Pronoun in Ewe: Its Role in Discourse," *Journal of West African Languages* 10, 141-177.
- Culy, Christopher (1994) "Aspects of Logophoric Marking," *Linguistics* 32, 1055-1094.
- Culy, Christopher (1997) "Logophoric Pronouns and Point of View," *Linguistics* 35, 845-859.
- Gee, James Paul (1977) "Comments on the Paper by Akmajian," in Peter W. Culicover, Thomas Wasow, and Adrian Akmajian (eds.) *Formal Syntax*, 461-481. New York: Academic Press.
- Hagège, Claude (1974) "Les pronoms logophoriques," *Bulletin de la Société de Linguistique de Paris* 69, 287-310.
- Hasegawa, Yoko (2002) "Speech-Style Shifts and Intimate Exaltation in Japanese," *Proceedings from the Main Session of the 38th Annual Meeting of the Chicago Linguistic Society: Volume 38-1*, 269-284.
- Hasegawa, Yoko and Yukio Hirose (forthcoming) "What the Japanese Language Tells Us about the Alleged Japanese Relational Self." To appear in *Australian Journal of Linguistics*.
- Hirose, Yukio (1986) *Referential Opacity and the Speaker's Propositional Attitudes*. Tokyo: Liber Press.
- Hirose, Yukio (1995) "Direct and Indirect Speech as Quotations of Public and Private Expression," *Lingua* 95, 223-238.
- 廣瀬幸生 (1997) 「人を表すことばと照応」廣瀬幸生・加賀信広「指示と照応と否定」1-89頁, 研究社出版
- Hirose, Yukio (2000) "Public and Private Self as Two Aspects of the Speaker: A Contrastive Study of Japanese and English," *Journal of Pragmatics* 32, 1623-56.
- 廣瀬幸生 (2000) 「視点と知覚空間の相対化」青木三郎・竹沢幸一編『空間表現と文法』143-161頁, くろしお出版
- 廣瀬幸生 (2001) 「授受動詞と人称」『言語』30巻5号, 64-70頁
- 廣瀬幸生 (2002) 「話し手概念の解体から見た日英語比較」『筑波大学「東西言語文化の類型論」特別プロジェクト研究報告書 平成13年度V』723-755頁, 筑波大学
- Hirose, Yukio (2002) "Viewpoint and the Nature of the Japanese Reflexive *Zibun*," *Cognitive Linguistics* 13, 357-401.
- 廣瀬幸生・長谷川葉子 (2001) 「日本語から見た日本人—日本人は『集団主義的』か〈上・下〉」『言語』30巻1号 (86-97頁), 同2号 (86-96頁)
- Huang, Yan (2000) *Anaphora: A Cross-linguistic Study*. Oxford: Oxford University Press.

- Kirsner, Robert S. and Sandra A. Thompson (1976) "The Role of Pragmatic Inference in Semantics: A Study of Sensory Verb Complements in English," *Glossa* 10, 200-240.
- 久野 暉 (1978) 『談話の文法』大修館書店
- Lakoff, George (1987) *Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*. Chicago: University of Chicago Press.
- Stirling, Lesley (1993) *Switch-Reference and Discourse Representation*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Urmson, J. O. (1963) "Parenthetical Verbs," in Charles E. Caton (ed.), *Philosophy and Ordinary Language*, 220-240. Urbana: University of Illinois Press.